

[研究論文]

# 非日常（旅行行事）において、第三の大人との出会い （キャリア教育プログラム）が将来のキャリア意識に 与える影響の調査

—山形明正高校の実践事例から—

小林 等

## 〈要 約〉

日本では、学校教育から社会へとスムーズに移行するために、「キャリア教育」が重視されている。この取り組みは、特に若者のキャリアに対する意識を高め、フリーターや無業者の増加、就職後の早期退職といった社会的課題に対処することを目的としている。VUCA時代の労働市場の変化、ソサエティ 5.0の進展、AI革新による自動化と仕事内容の変容に対応し、技術的スキルだけでなく創造性や批判的思考を含む、AIなどに取って代わることのできないスキルの育成が重要とされている。キャリア教育は、生徒が自己理解を深め、社会の変化に適応できる力を身につけ、自分のキャリアを形成するための支援を目指しており、民間企業によるキャリア教育プログラムを取り入れる学校が増えている。

本研究では、山形県の高校で実施されたJTBが提供するキャリア教育プログラムが、高校生のキャリア意識に及ぼす影響を分析した。また今回は多面的に評価するためにインタビュー調査とアンケート調査を行い結果を考察した。

その結果として、キャリア教育プログラムを通じて、生徒が自己認識の深化や社会参画に対する前向きな姿勢を形成する機会を得たことが示された。一方で、将来の具体的な行動計画を立て、それを実行に移すためのさらなる支援が必要であること、そしてその効果の継続性を追跡する必要があることが示唆された。

キーワード：キャリア教育、研修旅行、自己理解、キャリア意識

## 1 はじめに

### 1.1 研究の背景

近年、学校教育から社会への円滑な移行に関する課題が顕在化している。この問題に対処するため、文部科学省は平成11年12月の中央教育審議会答申「今後の初等中等教育と高等教育の接続の改善について」において、「キャリア教育」という概念を初めて導入した。この答申では、学校教育と職業生活との連携改善に重点を置き、教育の最終段階としての「学校教育と職業生活との接続」の改善を強調した。若年層のフリーター志向の増加、無業者数の増加、就職後の早期退職などの問題が深刻であり、教育政策は学校と職業生活の間の接続を改善し、若年者の社会へのスムーズな移行を支援することを目的としていた。

「キャリア教育」は、これらの社会的課題に対応するために提案され、特に「学校から職業への移行」を容易にすることを目的として提案された。「接続答申」では、急速に変化する社会・生活環境が子

子どもたちの社会的発達に与える影響を考慮し、小学校段階からのキャリア教育の重要性を強調している。平成11年の答申以降、「キャリア教育」は注目を集め、新学習指導要領では、個人が社会や世界とどのように関わり、充実した人生を送るかという視点が教育方針の中心に置かれている。

現代社会への対応としてのキャリア教育は、以下の3つの主要要因に基づいて展開されている。第一に、変動性 (Volatility)、不確実性 (Uncertainty)、複雑性 (Complexity)、曖昧性 (Ambiguity) を特徴とするVUCA時代において、労働市場の予測不可能な変化に対応し、個人の柔軟性と適応力を教育を通して向上させる必要がある。第二に、ソサエティ 5.0の示すサイバー空間と物理空間の融合は、新たな職種の出現と職業内容の変化を促し、新しい職業環境への適応能力の育成が求められる。第三に、AIなどの技術革新による自動化と職業内容の変容は、技術的スキルだけでなく、AIに取って代わることのできない創造性や批判的思考能力の育成をキャリア教育において重視する必要がある。

これらの背景を踏まえ、キャリア教育は生徒たちが自己理解を深め、社会の変化に適応できる能力を身につけること、そして一生にわたって自分のキャリアを形成するための支援を目的としている。教育機関では、生徒が新たな課題に対応するためのキャリア教育カリキュラムの強化と適応に協力が求められている。民間企業や団体によるキャリア教育プログラムの重要性も増しており、教員の働き方改革にも貢献している。さらに、修学旅行をはじめとする学校の旅行行事の目的にも変化が見られ、キャリア教育の要素を取り入れる動きが拡大している。

このようなキャリア教育に対しては、これまでさまざまな研究が行われている。小川 (2021) はドイツにおける職業教育の考え方を日本に導入された日本版デュアルシステムをもとに高等学校におけるキャリア教育の取り組みと意義に関する考察を行った。そこでは、日本版デュアルシステムが地域と連携したキャリア教育であること、生徒の自尊感情の育成に繋がっていることを明らかにした。次に、中井 (2022) は高校でキャリア教育を受けた特定の女子高校の卒業生を対象に、社会人になった際の影響について調査を行った。高校時代の成績が上位であるほどキャリア意識が高く、専門学校進学者のキャリア意識が低い、高卒就職者のキャリア意識は明確であることも明らかにされた。しかしながら、民間企業が提供する「第三の大人」(図1-1) との交流のキャリア教育プログラムを受講した後どの程度キャリア意識が変化するかはまだ明らかになっていない。

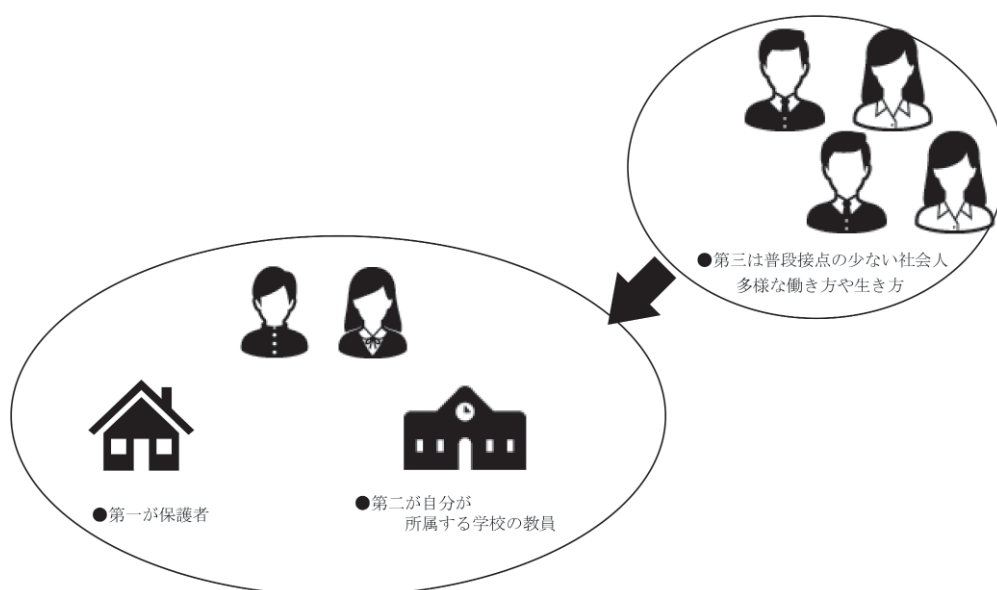


図1-1 第三の大人のイメージ図

## 1.2 研究の目的と意義

現代のキャリア教育プログラムは、民間企業やNPO団体などによって多様な形で提供されている。株式会社JTB（以下、JTB）も、これらのプログラムの提供者の一つであり、2013年から中学校・高校向けにキャリア教育プログラムの提供を行っている。JTBは学校の授業や旅行行事と連携したカリキュラムの提案を通じて、キャリア教育の普及に努めている。本研究の目的は、山形県にある私立の山形明正高等学校において実施された、JTBのキャリア教育プログラムが高校生のキャリア意識に及ぼす影響を分析することである。特に注目したのは、キャリア教育プログラムを通じた生徒たちと「第三の大人」（普段接する機会の少ない大人）との交流が、生徒の将来のキャリアに対する視野や、社会に対する積極的な姿勢、学習意欲にどのような影響を与えるかという点である。なお、本研究では、「第一の大人」を親や家族、「第二の大人」を自分の学校の教員、「第三の大人」を普段接することが少ない大人と定義した（図1-1）。

本研究は、キャリア教育が生徒の自己認識と社会参画への姿勢に与える具体的な影響を明らかにすることを目的とする。仮説として、非日常的な環境（旅行行事）において、「第三の大人」との出会いを通じたキャリア教育プログラムが、高校生の将来のキャリアに対する意識や態度に肯定的な変化をもたらすと考えた。そして、この仮説を検証するために、インタビュー調査およびアンケート調査を用い、教育プログラムの効果を定量的および定性的の両方の観点から評価を行った。今回、インタビュー調査を用いた理由は、生徒の体験や感想、意識の変化を深く掘り下げ、キャリア教育プログラムの影響を内面的な部分から質的データとして収集することが可能となるためである。また、アンケート調査は、キャリア教育プログラムが生徒に与えた影響を定量的に評価することが可能となるためである。このように、インタビュー調査とアンケート調査を組み合わせることで、多面的に評価することも可能となる。

## 1.3 論文の構成

本稿の構成について説明する。第1章ではキャリア教育の必要性と本研究の概要を提示する。また、関連する先行研究についてもまとめ、本研究の目的及び仮説検証の内容について説明する。第2章では、キャリア教育の変遷、現状と課題、および本研究の対象とするJTBのキャリア教育プログラムの概要を説明する。第3章では、山形明正高校における実践事例として、アンケート調査やインタビュー調査の実践を報告する。第4章では、研究結果を踏まえて本研究で提示した仮説に対する考察を行う。また、本研究の今後の課題と方向性についても述べる。

# 2 キャリア教育の現状とキャリア教育プログラムの事例

## 2.1 キャリア教育の変遷と最近の傾向

上述した通り、キャリア教育に関する議論は1999年12月の中央教育審議会答申以降継続して行われている。この答申は、「学校教育と職業生活との接続」の改善を提案し、小学校から段階を追ってキャリア教育を実施することを強調した。約10年ごとの学習指導要領の改定では、キャリア教育の重要性が常に強調されており、教育と社会の結びつきが重視されている。以下の表2-1では、キャリア教育のこれまでの変遷を示している。ただし、この教育方針の進化と社会の変化との間には乖離が生じていることに留意する必要がある。

表2-1 キャリア教育の変遷

年	キャリア教育に関わる主な出来事
1999年	中央教育審議会答申「今後の初等中等教育と高等教育の接続の改善について」 ●「キャリア教育」という用語が初めて登場 ●改善の方策 ・キャリア教育を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある。 ・家庭、地域と連携し、体験的な学習を重視する必要がある。 ・学校ごとに目標を設定し、教育課程に位置付けて計画的に行う必要がある。
2002年	「キャリア教育に関する総合的調査研究者会議」設置
2004年	文部科学省「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」において「キャリア発達に関わる諸能力（例）」として「4領域8能力」が示された。  人間関係形成能力→自他の理解能力，コミュニケーション能力 情報活用能力→情報収集・探索能力，職業理解能力 将来設計能力→役割把握・認識能力，計画実行能力 意思決定能力→選択能力，課題解決能力
2011年	中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」 ●基礎的・汎用的能力を構成する4つの能力を提示 ・人間関係形成・社会形成能力，自己理解・自己管理能力，課題対応能力，キャリアプランニング能力 ●改善の方策 ・社会的自立・職業的自立，学校から社会・職業への円滑な移行に必要な基礎的・汎用的能力の育成を目指すものである。 ・学校教育全体を通じてキャリア教育を推進する必要がある。 ・小学校，中学校，高等学校と系統的なキャリア教育を推進する必要がある。
2016年	中央教育審議会答申「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」 ●「キャリア教育」の重要性を明示 ●改善の方策 ・キャリア教育の中核となる特別活動の役割を確認する必要がある。 ・「キャリア・パスポート」を活用，見通し，振り返る活動を重視する必要がある。 ・アカデミック・インターンシップなど職業に関する体験活動について工夫する必要がある。
2017年	小学校及び中学校学習指導要領告示
2018年	高等学校学習指導要領告示 ●小学校，中学校，高等学校の総則に「キャリア教育の充実」の明記

出典：文部科学省（2023）『中学校・高等学校キャリア教育の手引き』を参考に筆者作成

文部科学省（2023）の報告によると、最近のキャリア教育は、産業や経済の分野での構造的変化、雇用の流動化を背景に進展している。学校から職業への移行に問題を抱える若者の増加が社会問題化しており、児童・生徒における将来に対する不安が顕著である。肉体的成熟が早い一方で精神的・社会的自立が遅れる傾向が指摘され、これらを背景にキャリア教育の推進・充実が期待されている。本資料では、これらの課題に対応するために、日本のキャリア教育施策の展開とその過程で浮かび上がる課題を検証している。

上記から示唆されるように、日本の社会変化とともに、教育界と産業界が一緒になり、定期的にキャリア教育の取り組みと効果を見直す必要がある。近年、産業界で提唱されている「ウェルビーイング」<sup>1)</sup>の概念が教育界にも影響を与えている。個人及び社会が、現在から将来にわたって幸せで満ち足りた状態を実現することを目指すもので、社会に出る前の段階で、生徒がウェルビーイングを意識したキャ



リア選択やキャリア意識を持つことが重要である。

## 2.2 キャリア教育の現状と課題

現代の日本において、キャリア教育は教育活動全体を通して推進されている。各学校は、教室内の活動だけでなく、地域団体、民間企業、家庭、保護者との積極的な連携を通じて、キャリア教育の目標と内容の開発に取り組んでいる。特に、社会に開かれた教育課程の実現を目指し、探究学習<sup>2)</sup>の中での企業や地域との連携を強化している。

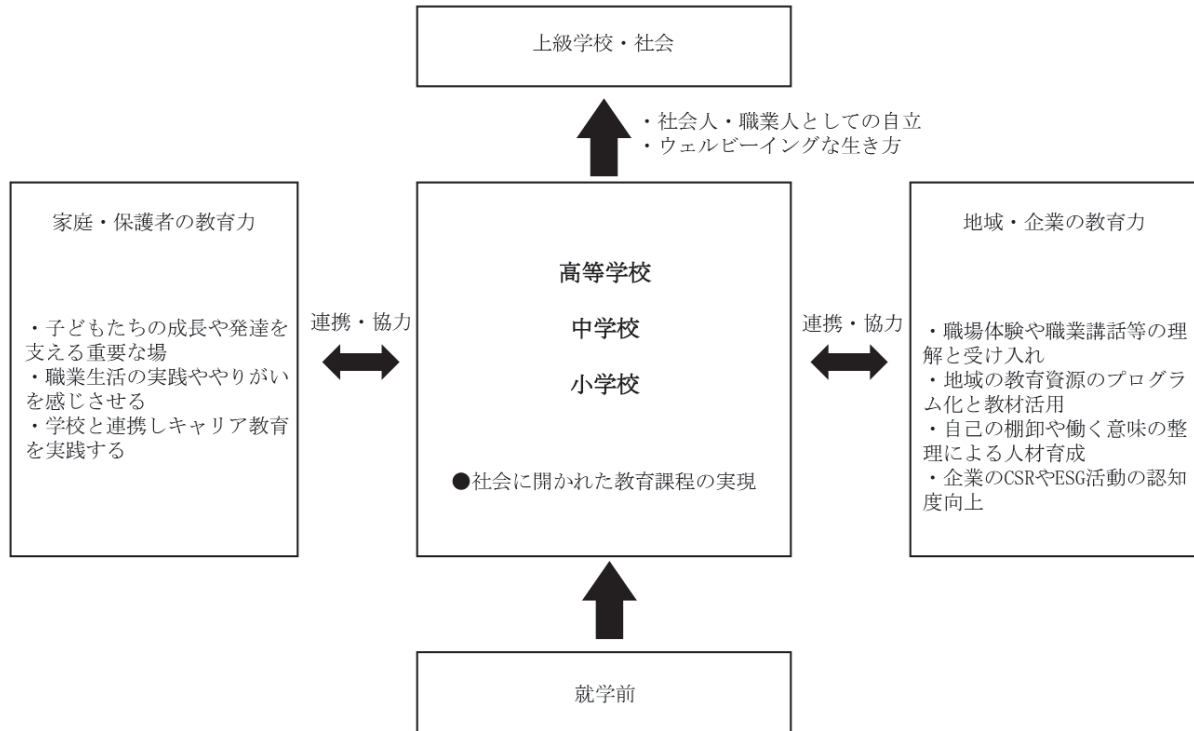


図2-1 キャリア教育における学校と企業と地域の連携

出典：文部科学省（2023）『中学校・高等学校キャリア教育の手引き』を参考に筆者作成

文部科学省（2023）の報告では、キャリア教育の発展における進歩と課題が指摘されている。キャリア教育の進展は特に職場体験活動の拡充に顕著であり、地域や民間企業と連携したプログラムが各地域の特性を活かして実施されている。しかし、キャリア教育がフリーターや若年無業者の増加を抑制するための対策と誤解される傾向があった。これは進学校におけるキャリア教育の体系的な推進が遅れた一因となっている。中学校の職場体験事業の実施では、多くの学校で形式的なものとなっている場合があり、学校の特色や生徒の実態を十分に踏まえた運用が必要とされている。このような課題を受けて、2011年1月の中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」では、「基礎的・汎用的能力」の育成が提唱された。この「基礎的・汎用的能力」は、キャリア教育において重要な指標となり、プログラムの設計においてもこれを基盤に据えることが強調されている。

## 2.3 非日常（旅行行事）の意義

学校の教育活動における旅行行事、特に修学旅行の歴史は古く、1886年2月に東京高等師範学校が行った房州（現在の千葉県南部）方面への遠足がその起源とされている。1958年の学習指導要領の

改訂により、修学旅行は学校行事の中の教育活動の一環として法規上定義された。林尚示（2022）によると、学校行事における旅行や集団的行事には、修学旅行や校外学習、遠足などが含まれ、生徒の自主性を促進し、協力や人間関係の構築を重視することが目指されている。旅行行事は、生徒の教育体験の充実に重要な役割を果たすと共に、物見遊山に留まらない教育的意義を持つことが求められる。

旅行行事は各教科との連携や総合的な学習の時間と結びつけることが重要である。この連動は、1回限りのイベントではなく、長期的なカリキュラムデザイン設計に不可欠である。修学旅行などの旅行・集団的行事には「旅のチカラ」と言われる特有の効果がある。社団法人日本旅行業協会「旅と健康」に関する調査研究プロジェクトによると、旅行中にはセロトニンという幸せホルモンの分泌が促され、脳内でアルファ波が増えることが確認<sup>3)</sup>されている。さらに旅行先での新鮮な経験は心の解放感や期待感を高め、意識の構造に変化をもたらす、脳を活性化させる効果がある。これらの経験は、心身のリフレッシュはもちろん、長期的な記憶にも影響を与えるとされている。これらの点が、JTBが提唱する「旅のチカラ」の根底にあると言える。

本研究では、この「旅のチカラ」を活用し、研修旅行先での社会人や大学生との交流を通じたキャリア教育の効果を検討している。また、旅行によって海馬などの脳の記憶に関わる部位が刺激され、新しい環境への適応が促進されることが示唆されている。一般的に、旅行はワクワク感を高め、「幸福度」「記憶力」「思考の柔軟性」といった心理的、認知的メリットをもたらす。これらの効果は、生徒が新しい環境や挑戦に対して積極的な姿勢を取る上で、重要な役割を果たすと期待される。

## 2.4 キャリア教育プログラムの事例

本研究では、JTBが提供するCASプログラム（Career Axis Support Program）を取り上げ、その効果と意義について検証を行った。このプログラムは、JTBが2013年に設立したキャリア教育事業室によって中学校・高校向けに提供されており、今回の研究対象である山形明正高校における実施例を通じて、生徒のキャリア意識に与える影響を分析した。

CASプログラムはアクティブラーニング型のキャリア教育プログラムであり、その目的は、中学生や高校生に「働くこと」を身近に感じさせ、自分の将来のキャリアを考えることで、社会と学びを継続し、学習モチベーションの向上を図ることにある。具体的な目的は以下の通りである。

1. 「働く理由」についての理解を深める。
2. 確かな職業観・勤労観を育成する。
3. 社会で必要なスキルを把握し、将来の設計を行う。

CASプログラムの特徴は以下である。

1. 公認ファシリテーターや活動的な社会人を派遣し、計6時間にわたってアクティブラーニングの手法を用いて授業を実施する
2. 生徒に親や身近な教員以外の社会人と接する機会を提供し、将来に向けて考えるきっかけを提供する。
3. 授業内容は、単に授業で企業や職業を知るだけでなく、社会で活躍するためのポイントやヒントを提供し、未来を見据えた上での行動計画の立案を促す。CASプログラムのコンセプトは、「キャリアの軸」を醸成することに重点を置く。これは「働く理由の中で最も大切にしたいこと」を意味し、自己分析や社会人との対話を通じて、自身の強化すべき点や学ぶべきことを探究する機会を提供する。

CASプログラムプログラムの流れは以下の通りである。

キャリア開発Ⅰ：自己理解に重点を置き、働く意味や重要性を考える。

キャリア開発Ⅱ：社会人とのパネルディスカッションを通じて、職業観や勤労観を学ぶ。

キャリア開発Ⅲ：社会で必要なスキルについて考え、未来の計画を立てる。

生徒たちは、プログラムを通じて自己の興味や強みを理解し、将来のキャリアについて具体的なイメージを持つことが可能となる。また、社会で働く社会人との対話を通じて、仕事の現実を学ぶことで、キャリア形成に対する意識を高めることができる。プログラムは学校や宿泊施設で年間を通じて実施され、各セッションは約100～120分で、3日間にわたる。多くの学校では、探究の時間や学校行事、修学旅行やオリエンテーションキャンプとの連携により、キャリア教育を実施している。本研究対象の山形明正高校では、高校1年生の研修旅行と結びつけて実施している点が注目に値する。

CASプログラムを実施する際の学校外の非日常の場面は、「旅のチカラ」を活用し、生徒のキャリア形成に大きな影響を及ぼす。学校外での体験と学校内での学習を連動させることで、より効果的なキャリア教育が可能となる。また、企業訪問や工場見学などを含む行事の中でキャリア教育を組み合わせることで、CASプログラムの効果をさらに高めることができる。表2-2では、学校・学校外・それ以外においてCASプログラムを実施する特徴を比較する。

表2-2 学校・学校外・それ以外におけるCASプログラムの比較

	学校	学校外	学校と学校外
実施形態	<ul style="list-style-type: none"> <li>・総合的な探究の時間</li> <li>・ホームルーム</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・旅行・集团的行事</li> <li>・修学旅行</li> <li>・研修旅行</li> <li>・オリエンテーションキャンプ</li> <li>・遠足</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・連動型</li> </ul>
進行形式	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校にファシリテーターや社会人を派遣</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・旅先にファシリテーターや社会人を派遣</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校と旅先にファシリテーターや社会人を派遣</li> </ul>
メリット	<ul style="list-style-type: none"> <li>・会場費用がかからない</li> <li>・授業の延長線上なので円滑な進行が可能</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・旅のチカラの効果を受ける</li> <li>・開放感</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校や学校外以外に中期的に長く意識づけができる</li> </ul>
デメリット	<ul style="list-style-type: none"> <li>・非日常感は弱い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・会場費用がかかる</li> <li>・行程に影響されやすい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・行事とキャリア教育のそれぞれの目的を考える必要がある</li> </ul>

### 3 山形明正高校の実践事例

#### 3.1 学校の教育方針やカリキュラム

まず、本研究が対象とする山形明正高等学校についての説明をする。山形明正高等学校は、山形県山形市に位置する私立高等学校である。1961年に山形自動車工業高等学校とし、1962年に蔵王工業高等学校、1991年に蔵王高等学校、2011年に山形明正高等学校となった。学校は全日制の普通科、自動車工学科、自動車工学専攻科、情報機械科を設置しているが、2022年に普通科のコースをグローバルリーダーコース、SA（進学）コース、総合教養コースの3つに再編成した。この学校は活発な部活動で知られ、サッカー、野球、バスケットボール、陸上競技、卓球などの体育系部活動や、テクノ

クラブ、美術、書道、吹奏楽、伝統芸能、インターアクト、パソコンなどの文化系部活動がある。生徒数は、1年生172名、2年生170名、3年生114名で、県外からの生徒が全体の約18%を占めている。また、女子は全体で約23%となり男子の割合が多い学校である。進路状況においては、2022年度における進学率（大学、短大、専門学校、専攻科）は63%、就職率は37%であった。普通科のコース変更により、今後は進学する生徒の割合が増加すると予想されている。また、特筆すべき点として、サッカー部が2023年に創部38年目にして初めて全国高校サッカー選手権の山形県代表となった。

教育の方針について学校要覧より抜粋し、以下に掲載する。

**【教育経営のスローガン】**

1. 勧めよう！「魅力あふれる学校づくり」
2. 育てよう！「学習で育てる、行事で育てる教育の実装」

**【重点目標・実践項目】**

1. 生徒を成長させる
  - ① 規範意識やマナーを身に付けさせ、レベルアップを図る
  - ② 自ら考え、主体的に発言し行動する姿勢を養わせる
  - ③ 自ら学ぶ学習意欲を養い、自ら課題を見つけ解決する力を身に付けさせる
  - ④ 生徒会活動、部活動の強化と活性化を進め、多くの活躍を実現させる

生徒の育成のために学校行事にも重点を置いていることを示している。また、生徒の思考力や主体性、さらには行動力について重点目標におき、基礎的・汎用的能力のキャリア教育につながる項目も含まれているのがわかる。

**進路部の運営方針**

**【基本方針】**

- I. 上級学校と企業や職業紹介機関等との連携を強め、すべての生徒の進路実現を目指す。
- II. 各科・各学年・各部との連携を強化し、生徒の適性と発達段階に応じた適切な指導を行う。
- III. 個々の生き方を考察させ、将来の目標を確立し、勉学意欲や勤労意欲に満ち、社会に貢献できる生徒を育成する。

**【重点目標】**

- I. 学校や企業との連携と、外部関係機関との協力関係を強化する。
- II. 各部署と連携して、進路に対する意識や目標を持たせ、勉学意欲・勤労意欲を高める。
- III. 早い段階から、個々の適性に応じた適切な指導を実践し、進路実現に導く。
- IV. 進学・就職等の進路指導体制を充実し、個に応じた3年間の指導体制を整備・推進させる。

このように進路部の運営方針として、上級学校や企業と連携し、社会人・職業人としての自立を目指した内容になっている。また、生徒と教員の良好な関係を構築し、各生徒に合わせた進路指導を実践している。高校1年生の研修旅行では、企業との連携を通じて、多角的な視点からキャリアを考察する機会を提供しており、生徒の将来像を具現化し、高校生活と結びつける試みを行っている。

**3.2 キャリア研修旅行の目的とプログラム実施概要**

山形明正高校におけるキャリア研修旅行は、高校1年生の段階で実施され、その目的は、生徒たち



の見識を広げ、自らのキャリアに対する認識を深めることにある。本研修旅行の目的は次の3つとなる。

- ① 見聞を広め、より広い視野を持つとともに、自らの進路を見据えた職業観を育てる。
- ② 受動的な学びに留まらず、まとめや発表を行うことで主体的に学ぶ姿勢を育て、より確かな学びとするとともに、科やクラスの取り組みの中で、互いに切磋琢磨しあう関係を築く。
- ③ 規律ある行動のもと、全行程を通じ集団の一員としての自覚を促し、自主的、協調的態度和よび、公德心を養う。

この研修旅行の意義と目的を深掘りするため、担当教員にインタビューを行った。その結果、彼らは以下のように述べている。

『高校1年生という時期は、これまで持っていた夢や目標を実現するために様々考えたり、悩んだりする時期です。本校は、生徒のキャリア教育をできるだけ早い時期に行い、そういった夢や目標に対して努力することで近づくことができるということを実感させ、高校生活を充実させたいと考えています。

生徒たちのキャリア教育で大切にしたいと考えていることは、より具体的に将来についてビジョンを持てることです。方法や手段を教えるのではなく、自分自身で気づくこと。そこに寄り添う信頼関係を先生や友人と持てることだと考えております。この「研修旅行」は、寝食を共にしながら、生徒自身が考える「夢や目標達成に向けて」に迫りたいと考えました。仕事に対する憧れは、目標に向けて努力するエネルギーとなります。本校生にとって大変貴重な経験となり、さらに、本校のキャリア教育において重要な行事となる「研修旅行」です。また、「キャリア教育＝職業の決定」とは考えておりません。キャリア教育は人間教育に直結する重要なものだと考えています。さらには、この研修旅行を通じて、いま何をしなければならぬのかを考えさせ、これからの高校生活での目標と具体的な行動につなげさせていきたい。』

今回のキャリア研修旅行における行程表は下記の通りである。5日にわたって実施され、研修旅行を挟んで、前後に学校内CASが実施される。

月日(曜)	行程	食事	宿泊施設
1 11/13 (月)	<b>学校内 CAS 1 (キャリア教育プログラム)</b>	朝：－ 昼：－ 夕：－	
2 11/14 (火)	<small>※ 1号車・2号車 → 中型バス 3～7号車 → 大型バス ※ 1～2・4～7号車の出発地は山形駅西口、3号車の小学校出発</small> 1号車/普通科(CL) 9名+引率   山形駅西口 → 山形駅西口 → アイスクリーム → (昼食：持参弁当) → 柳アジック → 宿泊(CAS2) 2号車/普通科(SA) 7名+引率   山形駅西口 → 山形駅西口 → 山形駅西口 → (昼食：持参弁当) → ついでに映画 → 宿泊(CAS2) 3号車/普通科1(組数) 33名+引率   山形駅西口 → 山形駅西口 → 山形駅西口 → (昼食：持参弁当) → 菅生 SA (ネクスコ東日本の方策室) → 仙台駅西口 → 宿泊(CAS2) 4号車/普通科2(組数) 32名+引率   山形駅西口 → 山形駅西口 → 山形駅西口 → (昼食：持参弁当) → イーパス → 宿泊(CAS2) 5号車/普通科3(組数) 28名+引率   山形駅西口 → 山形駅西口 → AGC → (昼食：持参弁当) → 古賀原グランピング KIKI LAC ついで → 宿泊(CAS2) 6号車/普通科4(組数) 28名+引率   山形駅西口 → 山形駅西口 → 山形駅西口 → (昼食：持参弁当) → 株式会社ナナイロ (KDX 仙台本店) → 宿泊(CAS2) 7号車/自動車工学科 23名+引率   山形駅西口 → 山形駅西口 → (昼食：持参弁当) → 日本自動車研究所 → モンゴロビタイルアート → 宿泊(CAS2)	朝：－ 昼：持参弁当 夕：宿舎	筑波山 ホテル青木屋         19時30分～21時30分 CAS2 (キャリア教育プログラム) 社会人・大学生との交流会
	1号車/普通科(CL) 9名+引率   宿舎 → KidsCreation → (昼食：弁当) → 南Musubi (道の駅●で社長と合同) → 宿舎 2号車/普通科(SA) 7名+引率   宿舎 → 筑波大学 …… (昼食：筑波大学食にて昼食) …… 柳アジック → 東京大学船キャンパス → 宿舎 3号車/普通科1(組数) 33名+引率   日本ナショナル劇場 (宿舎/富士の間に) → (昼食：弁当) → JAXA → 柳小森コーポレーション → 宿舎		筑波山 ホテル青木屋

3	11/15 (水)	<p>研修旅行とキャリア教育プログラムの日程</p> <p>4号車/普通科2(2組) 32名+引率1 朝食 9:00 9:30 飯丸高野会 (昼食:会館裏にて弁当) つばきエクスプレス 株式会社LIGHTz 朝食 12:00 13:00 15:00 15:30 17:30 18:00 頃</p> <p>5号車/普通科2(2組) 28名+引率1 朝食 9:20 10:15 11:30 つばきエクスプレス (昼食:弁当) ZOZO BASE 1 株式会社LIGHTz 朝食 13:00 15:00 15:30 17:30 18:00 頃</p> <p>6号車/情報科2 28名+引率1 朝食 9:00 9:30 11:30 新都市軌工業中央研究所 (昼食:弁当) 本田製作所つばき工場 パシフィックエンジェルズ 朝食 13:00 15:00 15:30 17:00 18:00 頃</p> <p>7号車/自動車工学科 23名+引率1 朝食 8:40 9:30 12:00 湘ベルオンラインラボセンター (昼食:弁当) 国土技術政策総合研究所 Bell Energy/Co-en 朝食 13:00 15:00 15:30 17:30 18:00 頃</p>	<p>朝: 朝食 昼: 弁当 ※研修旅行にて帰途 夕: 朝食</p>
4	11/16 (木)	<p>貸切バス7台(大型5台+中型バス2台) つばきエクスプレス</p> <p>朝食 6:40 つばき駅 7:30/7:52 秋葉原駅 8:49/9:10 頃 期別自主研修(昼食:各自) 8:00 8:58/9:10 頃 ※バスは朝は駐車場待機</p> <p>上野公園/国立科学博物館前集合 向島IC (首都高・東北道) 山形駅 19:00 ※12:50 集合 13:30 JR山形駅(1・2・4～7号車) ※13:15 配車: 3・4・5号車、13:20 配車: 1・2号車、13:25 配車: 6・7号車 学校(3号車) 18:50</p>	<p>朝: 朝食 昼: 各自 夕: ー</p>
5	11/17 (金)	<p>学校内 CAS3 (キャリア教育プログラム)</p>	<p>朝: ー 昼: ー 夕: ー</p>

図3-1 研修旅行とキャリア教育プログラムの日程

出典: JTB作成の行程表に基づき筆者作成

### 3.3 調査対象と方法

#### (1) 調査期間

2023年10月17日から2023年11月21日まで。

#### (2) 調査対象

本研究では、山形明正高校の高校1年生を対象とした。2名の生徒に対してインタビュー調査を行い、同じく高校1年生全体を対象にアンケート調査を行った。2名の生徒の選定については、GLコースであることと県内出身と県外出身であるという条件で、担当の教員から選んでいただいた。

#### (3) 調査手法

次に、インタビューにおける調査の実施状況及び調査手法の詳細について説明する。インタビュー調査では、JTBが提供するCASプログラム(キャリア教育プログラム)受講前後の意識変化に注目をした。特にプログラム受講前後での将来に対する見解の変容を調査した。各インタビューは約20分間、学校内の会議室で行い、生徒はインタビュー票を見ながら、質問に回答した。受講前のインタビューは10月17日に実施し、受講後のインタビューは11月21日実施した。各インタビューの質問項目は表3-1と表3-2に掲載している。

アンケート調査では、生徒全員に対してCASプログラムのキャリア開発Ⅰ(11月13日)、キャリア開発Ⅱ(11月14日)、キャリア開発Ⅲ(11月17日)の受講後に、プログラムを受けての気づきや感想を収集した。本研究では、インタビュー調査およびアンケート調査を用い、教育プログラムの効果を定量的および定性的の両方の観点から評価を行った。今回、インタビュー調査を用いた理由は、生徒の体験や感想、意識の変化を深く掘り下げ、キャリア教育プログラムの影響を内面的な部分から質的データとして収集することが可能となるためである。また、アンケート調査は、キャリア教育プログラムが生徒に与えた影響を定量的に評価することが可能となるためである。このように、インタビュー調査とアンケート調査を組み合わせることで、多面的に評価することも可能となる。また、インタビューの設計においては、約20分の中で簡単に答えられることをポイントに設計した。また、アンケートの設計においても、参加者全員がその場ですぐに答えることができるように質問の項目を減らし、プログラムの評価とプログラム受講後の気づきを得ることができようように設計した。

### 3.4 インタビュー調査内容と検証結果

#### (1) インタビュー対象者のプロフィール

本研究のインタビュー対象となったのは、次の二名の生徒である。

対象者A：GLコースに所属する男子生徒，1年生。東京都出身で現在は下宿生活を送りつつ，サッカー部に所属している。将来の夢はプロサッカー選手になること。

対象者B：同じくGLコースに所属する男子生徒，1年生。山形県出身で実家から通学しており，A氏と同じくサッカー部に所属。プロサッカー選手を目指しているが，その他にもサッカーに関連する職業に就きたいと考えている。

#### (2) 2023年10月17日実施のインタビューの項目と結果

2023年10月17日に実施されたキャリア教育プログラムおよび研修旅行に先立つインタビューで，対象者A及びBから得られた回答は，表3-1に詳細を記載する。

表3-1 10月17日インタビューの質問と回答

質問項目	A氏の回答	B氏の回答
1. 社会についてどのようなイメージを持っていますか？	「まあまあ明るいイメージを持っている」	「明るいイメージ」 「両親や祖父が楽しそうに仕事している」
2. 自分の将来について考えたことがありますか？	「深く考えたことがある」	「学校の授業で考えたことがある」
3. キャリア教育の授業を受けることについてどう思いますか？	「興味がある」	「少し興味がある」
4. 現在やこれからの「社会」への期待することは何ですか？	「いろんな人との壁をなくし，コミュニケーションをとりたい」 「高校生のうちから行事を通じて接点をつくり，いろんな人と話したい」	「仕事が楽しいイメージ」 「プロサッカー選手になって活躍したい」
5. 現在やこれからの「社会」への不安なことは何ですか？	「年金がなくなることやひきこもりが多いこと」 「仕事なくなるニュースをみたこと」	「プロサッカー選手になれなかった時の選択肢で何かがあるか」
6. 自分の将来について気になることは何ですか？	「プロサッカー選手になったらどのようにしてお金がもらえるのか」	「自分のなりたいたいものになれなかった時にどういう選択肢があるのかを知りたい」
7. 現在の将来の夢は何ですか？ それはなぜですか？	「プロサッカー選手になりたい」 「海外で有名な選手になりチームを優勝させたい，サポーターを幸せにしたい，チームで勝利をわかちあいたい」	「プロサッカー選手になりたい」 「今まで支えてきてくれた親に自分がここまでできること証明したい」
8. 高校卒業後の進路はどのように考えていますか？ それはなぜですか？	「プロサッカー選手になるか大学へ進学」	「プロサッカー選手になるか，トレーナーになるために専門学校へ進学，サッカーに関わる仕事に就きたい」
9. 現在，生きている上で大切にしたいことはありますか？ それはなぜですか？	「自分の意志を大切にしたい」 「進路を決める上でも自分で決断し，これからも継続していきたい」	「人として常に成長していくこと」 「中学校の部活動で教わった礼儀を大切にしていきたい」

インタビュー調査では，キャリア教育プログラムの受講前の社会に対するイメージ，将来に対する考え，およびキャリア教育への興味に関する生徒の認識を探った。A氏は，一般にポジティブながらも控えめな社会イメージを持ち，その背景には既存の社会構造に対する懸念が認められた。B氏は家族の影響を受けて明るい社会観を持っていたが，プロサッカー選手への道が閉ざされた場合の不安も表明した。キャリア教育の授業に対する興味は，両者ともある程度あると示唆されたが，それが行動変化にどのように繋がるかは明確でなかった。また，社会への具体的な期待と不安が明らかにされ，特にA氏は社会的コミュニケーションの向上への期待を，B氏はプロサッカー選手としての成功への

期待をそれぞれ持っていた。将来の夢や高校卒業後の進路選択についても、A氏は海外でのキャリア、B氏は家族への感謝を通じた生活を志向しており、キャリア選択において重視する価値観が異なっていることが見受けられた。

(3) 2023年10月21日実施のインタビューの項目と結果

2023年10月21日（火）に実施されたキャリア教育プログラムおよび研修旅行の受講後のインタビューで得られた回答は、表3-2に記載する。

表3-2 10月21日インタビューの質問と回答

質問項目	A氏の回答	B氏の回答
1. 受講後に行動の変化はありましたか？	「仕事について興味を持った」 「サッカーのモチベーションが上がった」 「サッカーが好きという自分の軸をそれに向けて頑張りたい」	「受講後に家に帰ってから海外ボランティア支援について調べた」 「海外について興味を持った」
2. 今までにこのようにキャリアを考える機会がありましたか？	「ほとんどない」	「中学校で職場体験を行った程度」
3. 受講して印象に残った言葉は何ですか？	「お金があるけど、自分のやりたいこと、お金じゃないことに気づいた」 「ほかの国で相手を理解すること、異文化を理解すること、コミュニケーションの大切さ、自分の考えを押しつけないこと」 「熱中する瞬間をつくること、自分で積み重ねて、キャプテンをまかせられること、5W1Hの大切さ、自分のトリセツをつくること」	「熱中できる瞬間を大切にすること」 「海外旅行や海外ボランティアの話はとても印象に残った」 「理系の話は難しかったが、大学の授業について教えてもらい興味を持った」
4. 自分の将来についてどんな考えを持ちましたか？	「プロサッカー選手は変わらない」 「海外で働きたい」 「引退後の自分をみる事ができた」 「サッカースタールのビジネス、教え方や指導者としての学びに興味を湧いた」 「大人の意見をきいて、みんなが自分の軸を持って楽しかった」 「楽しさが仕事につながっていた」	「サッカーというのは変わらずでプロサッカー選手になりたい」 「サッカー選手の通訳」 「高卒でプロを目指していたが、大学に進学も考えたい」 「海外に行ってみたい、サッカー以外でも海外に行きチャレンジしたい」 「今までは将来が曖昧だったが、海外で英語を活かした仕事にも興味を持った」

受講後のインタビューでは、キャリア教育プログラムが生徒の職業観と将来計画に与えた影響を検証した。A氏はサッカーに対する熱意を新たにし、キャリアの軸としてサッカーを追求する決意を固めた。また、情熱を追求し、異文化間コミュニケーションの重要性を学んだ。B氏は、中学校での職場体験を経て、国際的な視野を広げることに興味を持ち始めた。また、熱中できる瞬間と海外経験への関心が増した。両者とも、プログラムを通じてキャリアに関する多角的な視野を持ち、その影響を受けて、それぞれのキャリア構築に関して新たなステップを踏み出すことに成功している。インタビュー結果から、キャリア教育プログラムが生徒のキャリア発達に寄与すると同時に、生徒個々のキャリアに対する独自の視点を提供し、個人の情熱と社会的要請の間での自己認識の向上に貢献していることが示された。これらの結果は、プログラムが生徒の将来に対する観点を形成し、行動変化を促すための有効な手段となり得ることを示唆している。

3.5 アンケート調査内容と検証結果

アンケートの記述データから得られる情報は膨大であり、その中で単語間の関係性を明らかにすることは、言語のパターンを理解し、テキストの深層的な内容を解析する上で重要となる。本研究では、



KH Coderによる共起ネットワーク分析を用いて、キャリア開発 I の受講後に実施されたアンケート結果を分析した（樋口2020）。この分析方法は、計量テキスト分析の重要なツールであり、文書や記述から抽出された単語間の関連性を可視化し、単語同士の関係を探るものである。共起関係は、線を引くことで示され、線の種類（実線や点線）は共起の強度を表す。

### 3.5.1 キャリア開発 I の受講後のアンケート結果（N = 153名）

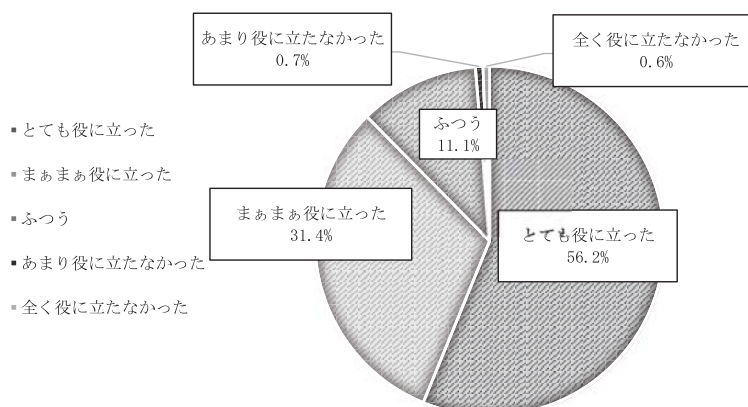


図3-2 質問①：キャリア開発 I 「事前学習」のアンケート結果（N = 158）

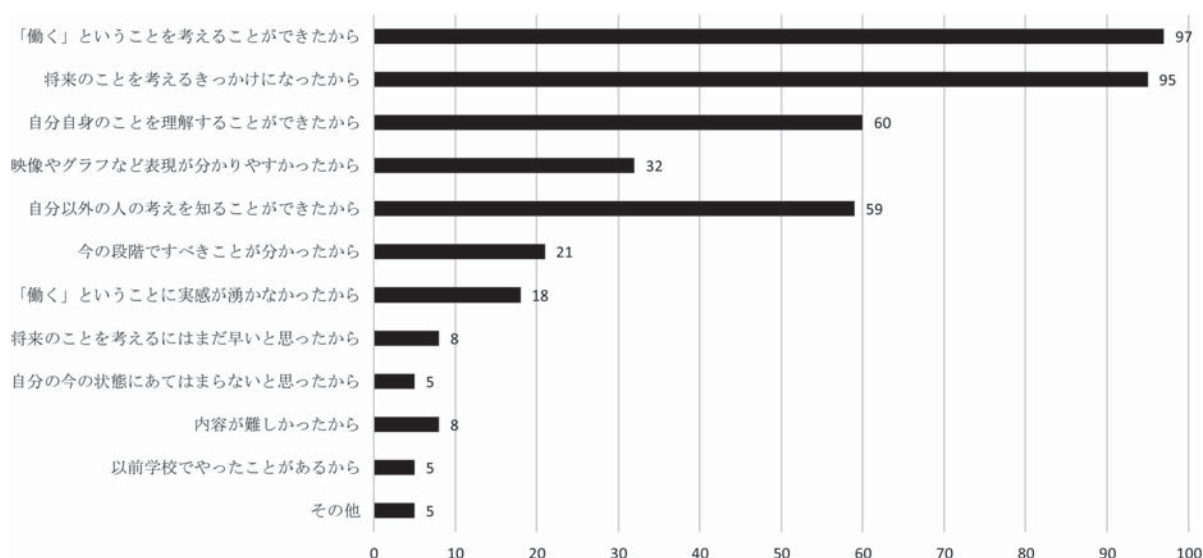


図3-3 質問②：質問①で選んだ理由のアンケート結果

アンケート結果（図3-2，図3-3）では、全体の87.1%がポジティブな評価をしており、特に「働くということを考えることができた」という点が63.3%の生徒に影響を与えていた。これは、高校1年生の時期から働くことや将来について考えることが重要であるということを示している。一方で、否定的な意見も存在し、将来のことを考える時期や内容についての懐疑的な見解も示されている。この分析からは、キャリア教育のタイミングと内容に関して、生徒一人ひとりの興味やニーズに応じたアプローチが必要であることが示唆される。また、生徒が自分の将来を具体的にイメージしやすくするための内容の工夫が求められる。この結果を踏まえ、キャリア教育プログラムのさらなる改善が必要であると考えられる。

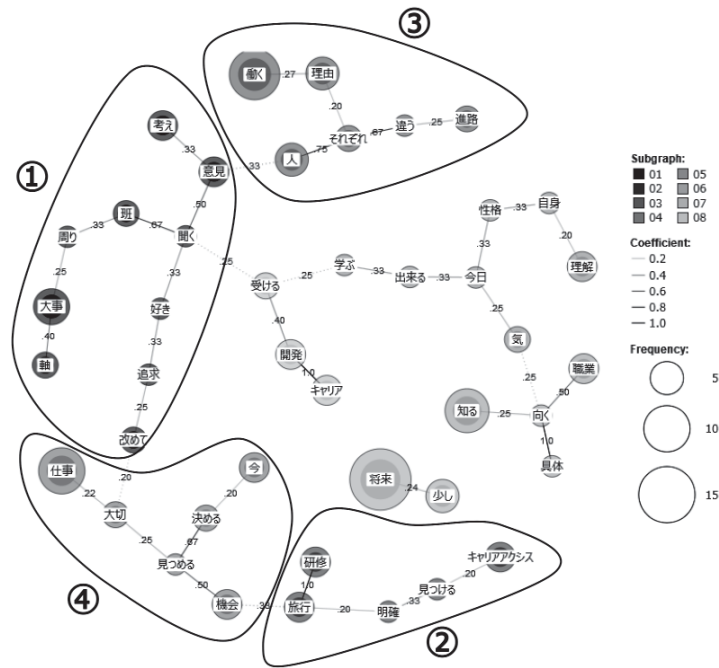


図3-4 「キャリア開発 I (事前学習)」の自由記述欄の共起ネットワーク分析結果

図3-4の共起ネットワークから、関連性の強い抽出語群は、①②③④の4つの群に分類されることがわかる。それぞれの特徴は下記のとおりである。

- ① 「班の人や周りの人の意見や考えを聞いてよかった」「軸が大事」「自分の好きなことを追求する」等の記述があることから班内外の多様な意見の交換を通じて、生徒たちの思考の幅が広がり、自身のキャリアに関する軸を考える契機が生まれたことが観察された。これは、生徒たちが自分自身の興味や価値観を探求する過程で、異なる視点を吸収し、多角的に考える能力を育成していることを示している。
- ② 「キャリアアクセスを見つける」「研修旅行のことについて明確になった」等の記述があることからキャリアアクセスの発見と研修旅行の目的への明確な理解が促進された。これは、生徒たちが自己の将来像についてより深い洞察を得ることができ、自己認識とキャリアに対する関心を高めることに寄与している。
- ③ 「働く理由は人それぞれ違う」「進路についてもかんがえるきっかけとなった」等の記述があることから生徒たちは、働く理由や進路選択に関して、個々に異なる考えを持つことが重要であると認識した。これは、グループワークを通じて、多様性を尊重し、他者の視点を理解することの価値を学んだことを示している。
- ④ 「仕事を決める上で、自分が何を大切にしているか見つめる機会となった」という記述から生徒たちは自己の進路や職業について深く考える機会を得た。これは、キャリア教育の効果として、生徒たちが自己の価値観や目標を見つめ直すことができたことを意味している。



### 3.5.2 キャリア開発Ⅱの受講後のアンケート結果（N = 138名）

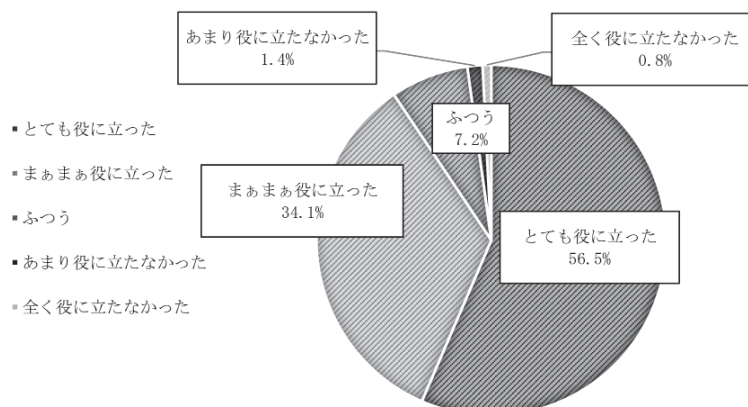


図3-6 質問①キャリア開発Ⅱ「社会人・大学生との交流」のアンケート結果（N = 138）

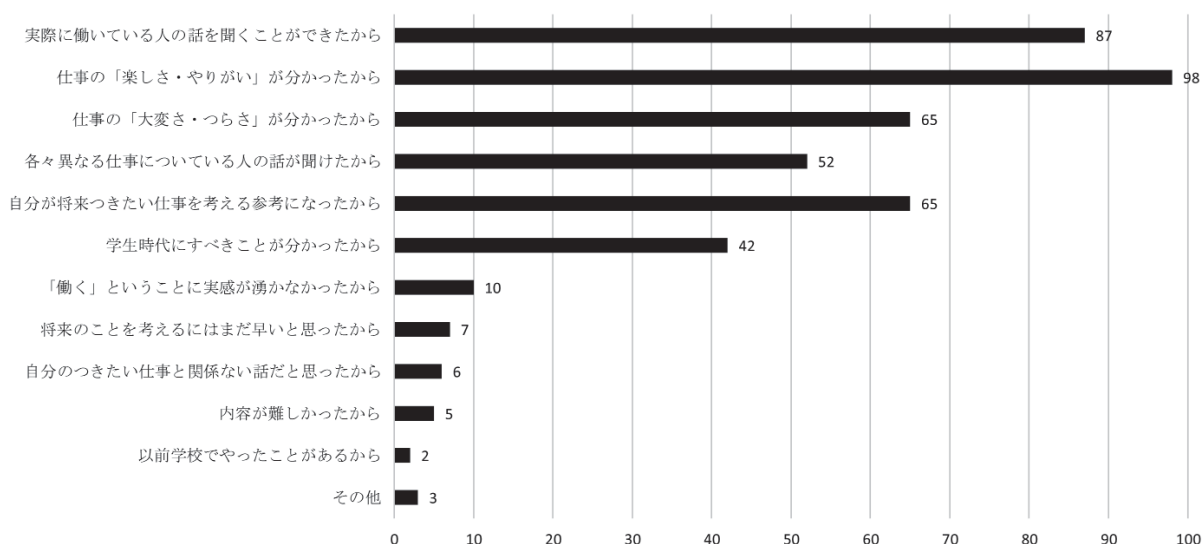


図3-7 質問②：質問①で選んだ理由のアンケート結果

キャリア開発Ⅱの受講後のアンケート結果（図3-6，図3-7）では，参加生徒の90.6%がプログラムに対して肯定的な評価を示している。この高い満足度は，プログラムが生徒たちに新たな視野を開く貴重な体験であることを反映している。具体的には，56.5%の生徒が「とても役に立った」と回答し，34.1%が「まあまあ役に立った」と評価している。このデータは，生徒たちが実際に働く社会人との対話を通じて，働く世界に対する理解を深めたことを示している。

肯定的な評価の主な理由としては，87名（63%）の生徒が「実際に働いている人の話を聞けた」と回答している。これは，生徒たちがキャリア教育を通じて職業のリアリティに触れ，仕事の実際の楽しさややりがいを理解する機会となっている。さらに，98名（71%）の生徒は「仕事の楽しさ・やりがい分かった」と評価しており，この結果は，生徒たちが職業の多様性とそれに伴う満足感を体験することができたことを意味している。一方，全体の約5%の生徒は「将来のことを考えるにはまだ早いと感じた」と回答し，約4.3%の生徒は「自分の志望する職業とは関係ないと思った」と答えている。この反応は，キャリア教育プログラムの内容とタイミングが，生徒一人ひとりの発達段階や興味に完全に合致していない可能性を示唆している。この点は，今後のキャリア教育プログラムの



設計において、より個別化されたアプローチを取り入れるべき重要な示唆となっている。

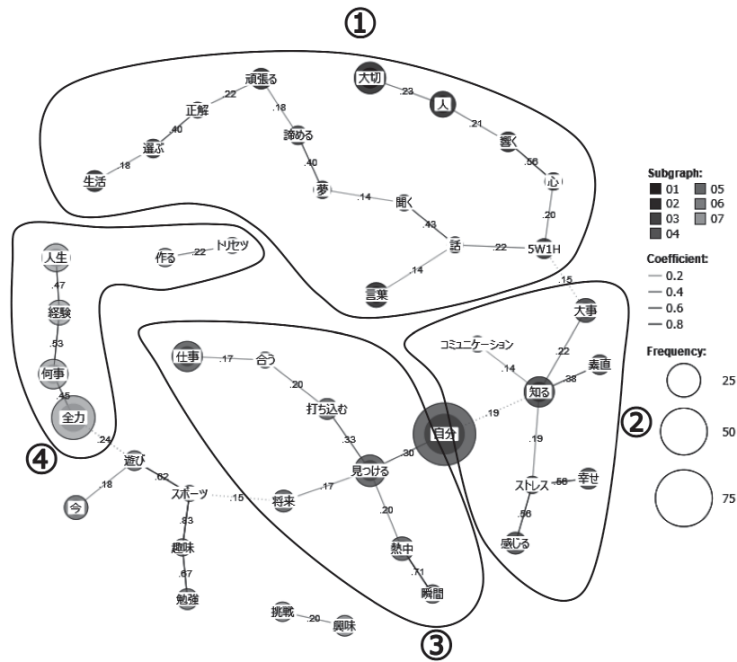


図3-8 「社会人・大学生との交流会」の中で印象に残ったメッセージとその理由の共起ネットワーク分析結果

生徒たちに「社会人・大学生との交流」の中で最も心に響いた言葉と、その理由について記述してもらった。共起ネットワーク分析（図3-8）により、生徒の回答から抽出された関連性の強い語群が、以下の4つの群に分類されることが明らかになった。

- ① キャリアと決断に関する言葉：「5W1Hの話」「夢を諦めない」「どんな道を選んでも正解にする」といった言葉が含まれる。これらは、キャリア選択における積極的な姿勢や決断の重要性に関連しており、生徒たちに強い印象を与えている。
- ② 内省と自己受容に関する言葉：「自分の幸せやストレスに感じることを素直に受け止めることと知ることが大事」という言葉が挙げられる。このカテゴリーは、自己認識の深化と自己受容の重要性を反映している。
- ③ 情熱と熱中に関する言葉：「熱中できる瞬間を見つける」「打ち込めることを見つける」などの言葉が含まれており、仕事や活動における情熱の重要性を示している。
- ④ 努力と経験の価値に関する言葉：「自分のトリセツを作ること」「何事も全力で取り組むことが人生経験になる」という言葉がここに分類され、努力と経験の積み重ねが自己成長に不可欠であることを示している。

これらの結果から、「第三の大人」からのメッセージが、生徒たちにとって親や教員の言葉とは異なる重みを持ち、強く心に響いていることが分かる。興味深いのは、同じ内容のメッセージであっても、異なる発信者からのものが異なる影響を与える可能性があることだ。ただし、これらのメッセージが生徒の長期記憶にどの程度影響を与えるかについては、今後の研究課題である。

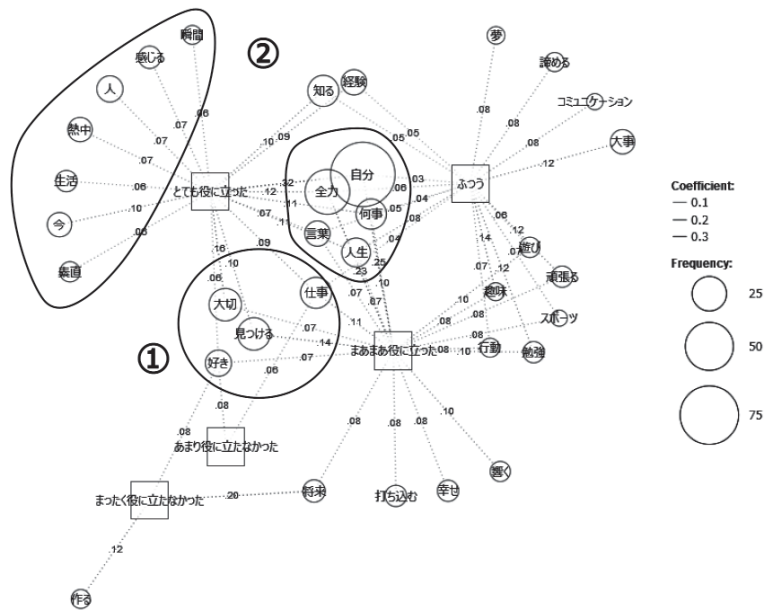


図3-9 「社会人・大学生との交流会の5段階評価」と「印象に残ったメッセージとその理由」の共起ネットワーク分析結果（クロス分析）

図3-9の共起ネットワーク（クロス分析）による結果は、「社会人・大学生との交流」に関する生徒たちの感想と、彼らが交流の中で最も心に響いた言葉についての深い洞察を提供している。この分析から、以下の点が明らかになった。

- ① 「仕事」「好き」という単語の高頻度の使用：これらの単語が多くの回答者に共通して使用されたことから、生徒たちは仕事に対して肯定的なイメージを持っていると考えられる。これは、キャリア教育プログラムが生徒たちに対して、仕事の意義や魅力を効果的に伝えていることを示唆している。
- ② キーフレーズの影響力：「今」「熱中」「人」「感じる」といった単語が、「とても役に立った」と答えた生徒たちの間で頻繁に使われている。これらの単語は、生徒たちが現在の瞬間を大切に、情熱を持って取り組むことの重要性を理解していることを示している。また、「自分」「全力」「何事」「人生」「言葉」といった単語が複数の評価カテゴリーにまたがって頻出していることは、生徒たちが自己実現と全力投球の価値を学んでいることを示している。

以上の分析結果から、キャリア教育プログラムが生徒たちに対して肯定的な影響を及ぼしていることが明らかである。しかし、プログラムのさらなる改善に向けては、生徒一人ひとりの興味やニーズに応じたより個別化されたアプローチを取り入れることが重要である。また、生徒たちが短い単語やキーフレーズを通じて深いインサイトを得ていることから、今後の「第三の大人」からのメッセージでは、簡潔でインパクトのあるキーワードの使用が効果的であることが示唆される。

### 3.5.3 キャリア開発Ⅲの受講後のアンケート結果（N = 140名）

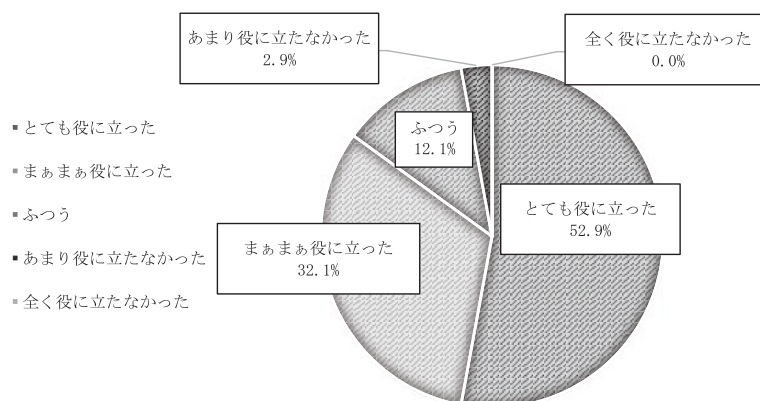


図3-10 質問①：キャリア開発Ⅲ「発展学習」のアンケート結果（N = 140）

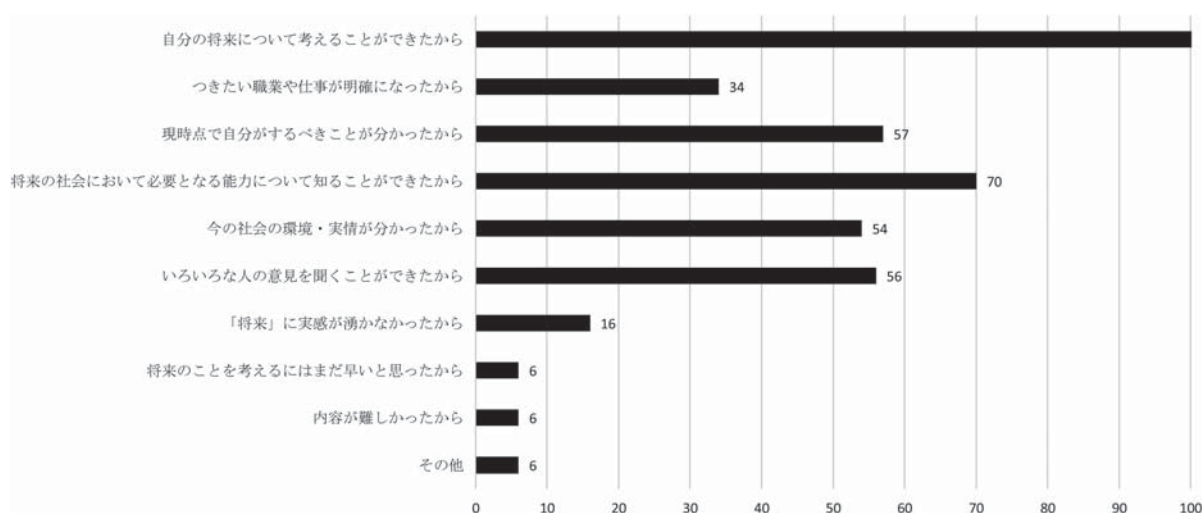


図3-11 質問②：質問①で選んだ理由のアンケート結果

キャリア開発Ⅲの受講後アンケートにおける結果分析（図3-10，図3-11）は、生徒たちがプログラムからどの程度の価値を見出しているかを示している。具体的には、「とても役に立った」と答えた生徒が全体の52.9%を占め、「まあまあ役に立った」と答えた生徒が32.1%で、これらの結果から全体の85%の生徒がプログラムに対して肯定的な評価をしていることが明らかとなった。評価に対する理由としては、106名（全体の75.7%）の生徒が「自分の将来について考える機会が得られた」と回答し、また、70名（全体の50%）の生徒は「将来の社会で必要となる能力を理解できた」と述べている。これらの反応から、生徒たちがグループワークを通じて自分の将来のキャリアについて深く考え、社会における必要な能力についての洞察を深めていることが示されている。一方で、全体の11.4%に当たる16名の生徒が「将来に対する実感が湧かなかった」と感じ、4.2%に相当する6名が「将来のことを考えるにはまだ早い」と回答している。更に、同じく4.2%の生徒が「内容が難しすぎた」と答えており、これらの意見はプログラムにおける今後の改善点を示唆している。具体的には、生徒たちが自身の将来をより明確にイメージしやすくするための内容の調整が求められることが明らかとなった。





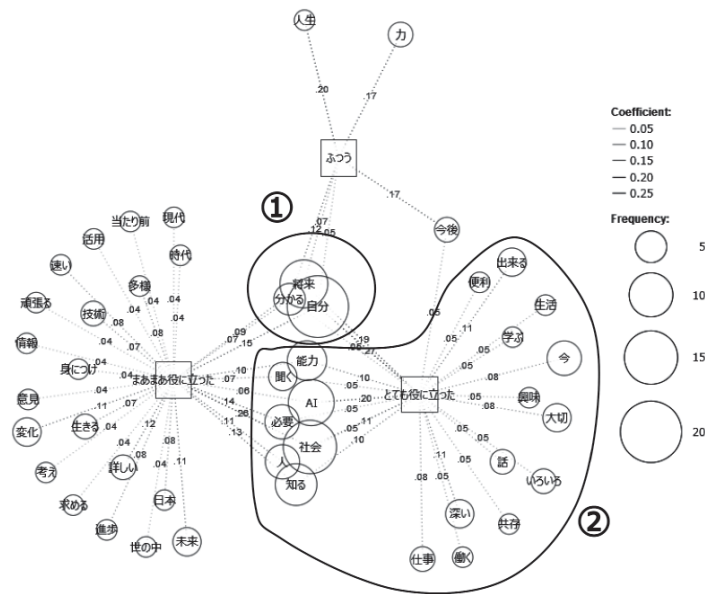


図3-13 共起ネットワーク（クロス分析）プログラムの5段階評価」と「プログラム受講後の感想の記述」の共起ネットワーク分析結果（クロス分析）

「キャリア開発Ⅲ（事後学習）」に対する生徒たちの反応から共起ネットワーク分析を行った結果、以下の内容が明らかとなった。（図3-13）

- ① キーワードの共通使用：「将来」「自分」「分かる」といった単語が多くのグループに共通して使用されていた。このことから、生徒たちが自分の将来について考える機会を得られたことが窺える。これは、プログラムが生徒たちに自己認識を深めるきっかけを提供していることを示している。
- ② 肯定的評価とその背景：「とても役に立った」と答えた生徒たちの間で頻出した「深い」「出来る」「今」「大切」といった単語は、彼らが仕事やキャリアに関する深い洞察を得たことを示唆している。また、「まあまあ役に立った」と答えた生徒たちの間で多く見られた「AI」「社会」「必要」「能力」「知る」という単語は、今後の社会変化に対応するためのスキルや知識の重要性を理解していることを示している。

以上の分析から、「キャリア開発Ⅲ」のプログラムは、生徒たちが自分のキャリアや未来について深く考え、社会の変化に適応するための必要な能力について学ぶ上で、有意義な役割を果たしていることが明らかとなった。しかし、生徒たちが具体的な行動計画を立てる上での支援や、今後のキャリアにおけるこれらの学びの具体的な応用方法については、さらなる説明が必要であることも示唆されている。

## 4 おわりに

### 4.1 調査結果の考察

本研究の目的は、JTBが提供するCASプログラム（キャリア教育プログラム）が高校生のキャリア意識に与える影響を明確にすることであった。このプログラムを通じて、生徒は「第三の大人」との交流を経験し、自己認識の深化及び社会参画に対する前向きな姿勢を形成する機会を得た。

インタビュー結果からは、生徒たちがプログラムを通じて職業に対する興味を深め、具体的なキャリアパスに対するモチベーションを高めたことを示している。A氏はサッカーをキャリアの中心に据

えるようになり、B氏は国際的な視野を持つことへの関心を深めた。これは、プログラムが生徒のキャリア意識を拡大し、さまざまなキャリアオプションの自己探求へのきっかけを提供したことを示している。また、インタビューを通じて、金銭的な報酬だけでなく、情熱の追求と異文化間コミュニケーションの価値についての気づきが得られた。これらの結果は、キャリア教育が生徒の自己認識を深めるための強力なツールであるとともに、異なる視点からキャリアを考える機会を提供することの重要性を裏付ける。しかし、インタビューからは、生徒が将来のキャリアを具体的にイメージする過程において、継続的な支援が必要であることも示唆された。したがって、生徒が自分自身のキャリアについてより深く考え、それを具体的な計画に落とし込むためのさらなる支援が求められる。

アンケート結果からは、キャリア意識と社会に対する前向きな姿勢に顕著な影響を与えたことが明らかとなった。キャリア開発Ⅰでは87.1%、キャリア開発Ⅱでは90.6%、キャリア開発Ⅲでは85%の生徒がプログラムにポジティブな評価を示した。一方で、一部の生徒は「将来のことを考えるにはまだ早い」と感じたり、自分の興味とは関係ない話を聞くことに否定的であったことから、キャリア教育におけるタイミングと内容の調整の必要性が示唆される。このことは、文部科学省（2023）でも示されている「一人ひとりの社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力と態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」とも合致している。これは、生徒一人ひとりの興味やニーズに応じてキャリア教育を提供する重要性を強調している。総じて、JTBのCASプログラムは、生徒のキャリアに対する意識を肯定的に変化させ、自己認識と社会参画への姿勢に実質的な影響を与えていると考えられる。しかし、生徒が具体的な行動計画を立て、それを実行に移すためのさらなる支援やガイダンスが必要であるとも示唆されている。また、プログラムの長期的な影響に関する継続的な追跡調査の実施が求められる。

#### 4.2 今後の方向性と研究の課題

本研究では、「旅のチカラ」を活用したキャリア教育プログラムの受講が、生徒のキャリア意識に与える影響を検証した。キャリア教育プログラムに対するポジティブな評価とともにいくつか懐疑的な意見を分析することができた。しかし、生徒が将来的な目標設定や具体的な行動に結びつけるプロセスについては、検証から明確な結論を導くことができなかった。そのため、生徒が高校生活を通じて自己の目標を明確にし、行動に移すための支援を提供するキャリア教育プログラムの再設計が必要であると考えられる。さらに、プログラム直後のポジティブな反応は観察されたが、その効果が長期的に持続するかについては未確認である。したがって、継続的な追跡調査を実施し、キャリア教育の長期的な影響を明らかにする必要がある。

また、本研究では、「第三の大人」との交流が、短期的には生徒に刺激を与えたことは認められるが、そのメッセージが生徒の長期記憶にどのように影響を与えているかについての分析は行われていない。今回受講した生徒のキャリア意識の変化および効果的なキャリア教育プログラムの設計に関しては、引き続き継続的な検証を進める必要がある。キャリア教育の効果を最大化し、生徒一人ひとりのキャリア発展に資するプログラムの開発を目指していくことが、今後の重要な課題である。さらに、今回の研究では特定の学校をサンプルとして選定し研究を行ったが、今後はより多数のサンプルに対して同様の研究を行うことも重要な課題である。異なる地域や背景を持つ学校を対象とすることで、プログラムの普遍性とその影響の範囲についての理解を深めることができる。これにより、キャリア教育の効果をさらに具体的に測定し、多様な生徒に適用可能な教育プログラムの開発に貢献できると考えられる。

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、株式会社JTB、山形明正高等学校のインタビューにご対応いただいた教員の皆様、生徒様には多大なるご協力をいただきました。この場をお借りして深く感謝申し上げます。

## 注

- 1) ウェルビーイングとは「良い状態」を意味する言葉で、世界保健機関（WHO）では個人や社会が享受すべき理想的な状態として定義されている。この概念は、単に病気でないことや弱っていないということではなく、身体的、精神的、社会的な良好さを含む全面的な幸福を指し、しばしば「幸福」と同義で使われる。
- 2) 探究学習とは、生徒たちが地域や企業が直面する問題に自ら問いを立て、解決策を模索する過程で、情報収集・整理・分析、意見交換、協働などの活動を行う。このプロセスを通じて、生徒たちは自身の興味関心を高め、将来のキャリアを考えるきっかけを得る。
- 3) 社団法人日本旅行業協会（2001）「旅の健康学的効果事業報告書」、社団法人日本旅行業協会（2009）「21世紀のツーリズム創造へ 数字が語る旅行業2009」

## 参考文献

- 小川須美江（2021年）『高等学校におけるキャリア教育の意義に関する考察：進路多様校のデュアルシステムを事例として』
- 社団法人日本旅行業協会（2001年）『「旅と健康」に関する研究プロジェクト旅の健康学的効果事業報告書』
- 社団法人日本旅行業協会（2009年）「21世紀のツーリズム創造へ 数字が語る旅行業2009」
- JTB（2023年）CASプログラム（Career Axis Support Program）の紹介  
<https://www.jtbbwt.com/education/service/solution/jh/in-school-program/workshop/cas/>（最終閲覧日：2023年12月11日）
- 中井咲貴子（2022年）『女子に特化したキャリア教育がその後のキャリア形成に与える影響—女子校卒業生への聞き取り調査から』キャリアデザイン研究, 18, 131-137.
- 日経ビジネス（2023年）『旅は「旅」は脳によい影響を与える 自然に触れると注意力も回復』  
<https://business.nikkei.com/atcl/gen/19/00283/092600229/?P=2>（最終閲覧日：2023年12月25日）
- 日本キャリア教育学会（2023年）『キャリア教育の射程』株式会社実業之日本社
- 林尚示（2022年）『特別活動 改訂二版—総合的な学習（探究）の時間とともに—』学文社
- 樋口耕一（2020年）『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—第2版』ナカニシヤ出版
- 文部科学省（2023年）『中学校・高等学校キャリア教育の手引き』実業之日本社
- 文部科学省・中央教育審議会（2011年）「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(答申)  
[https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11402417/www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301877.htm](https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11402417/www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301877.htm)（最終閲覧日：2023年12月25日）
- 文部科学省（2023年）学校と地域でつくる学びの未来「コミュニティ・スクール」と「地域学校協働活動」の一体的推進 <https://manabi-mirai.mext.go.jp/torikumi/chiiki-gakko/>（最終閲覧日：2023年12月25日）
- 宮田純也（2023年）『SCHOOL SHIFT あなたが未来の「教育」を体現する』明治図書出版
- 山形明正高等学校（2023年）『学校要覧』

（こばやし ひとし）

## 付録：アンケート調査票

---

CASプログラム（キャリア開発Ⅰ）事前学習

質問① 下記の質問を読んで当てはまる番号に○をつけてください。

◆「キャリア開発Ⅰ（自己理解）」はいかがでしたか？

- 5 とても役に立った
- 4 まあまあ役に立った
- 3 ふつう
- 2 あまり役に立たなかった
- 1 まったく役に立たなかった

質問② 質問①で選んだ理由を下記の中から選び、当てはまるものすべての番号を選択してください。（複数選択可）

- 01 「働く」ということを考えることができたから
- 02 将来のことを考えるきっかけになったから
- 03 自分自身のことを理解することができたから
- 04 映像やグラフなど表現が解りやすかったから
- 05 自分以外の人の考えを知ることができたから
- 06 今の段階ですべきことがわかったから
- 07 「働く」ということに実感が湧かなかったから
- 08 将来のことを考えるにはまだ早いと思ったから
- 09 自分の今の状態にあてはまらないと思ったから
- 10 内容が難しかったから
- 11 以前学校でやったことがあるから
- 12 その他

質問③ 「キャリア開発Ⅰ（自己理解）」を受けて感想や気づき、さらに知りたいこと等、自由に記入してください。（自由記述）

---

CASプログラム（キャリア開発Ⅱ）社会人・大学生との交流会

質問① 下記の質問を読んで当てはまる番号に○をつけてください。

◆「開発Ⅱ（社会人・大学生との交流）」はいかがでしたか？

- 5 とても役に立った
- 4 まあまあ役に立った
- 3 ふつう
- 2 あまり役に立たなかった
- 1 まったく役に立たなかった

質問② 質問①で選んだ理由を下記の中から選び、当てはまるものすべての番号を選択してください。（複数選択可）

- 01 実際に働いている人の話を聞くことができたから
- 02 仕事の「楽しさ・やりがい」がわかったから
- 03 仕事の「大変さ・つらさ」がわかったから
- 04 各々異なる仕事についている人の話が聞けたから
- 05 自分が将来つきたい仕事を考える参考になったから
- 06 学生時代にすべきことがわかったから
- 07 「働く」ということに実感が湧かなかったから



- 08 将来のことを考えるにはまだ早いと思ったから
- 09 自分のつきたい仕事と関係ない話だと思ったから
- 10 内容が難しかったから
- 11 以前学校でやったことがあるから
- 12 その他

質問③ 「キャリア開発Ⅱ（社会人・大学生との交流）」の中で一番心に響いた言葉は何ですか？（自由記述）

質問④ 質問③で記入した言葉を聞いて、どう思いましたか？（自由記述）

---

#### CASプログラム（キャリア開発Ⅲ）事後学習

質問① 下記の質問を読んで当てはまる番号に○をつけてください。

◆「キャリア開発Ⅲ（発展学習）」はいかがでしたか？

- 5 とても役に立った
- 4 まあまあ役に立った
- 3 ふつう
- 2 あまり役に立たなかった
- 1 まったく役に立たなかった

質問② 質問①で選んだ理由を下記の中から選び、当てはまるものすべての番号を選択してください。（複数選択可）

- 01 自分の将来について考えることができた
- 02 つきたい職業や仕事が明確になった
- 03 現時点で自分がすべきことが解った
- 04 将来の社会において必要となる能力について知ることができた
- 05 今の社会の環境・実情が解った
- 06 いろいろな人の意見を聞くことができた
- 07 「将来」に実感が湧かなかったから
- 08 将来のことを考えるにはまだ早いと思ったから
- 09 内容が難しかったから
- 10 その他

質問③ 「キャリア開発Ⅲ（事後学習）」を受けて感想や気づき、さらに知りたいこと等、自由に記入してください。（自由記述）

# Investigating the Impact of Encounters with ‘The Third Adult’ (Career Education Program) on Future Career Consciousness in Study Tour: A Case Study of Yamagata Meisei High School

Hitoshi KOBAYASHI

## Abstract

The Japanese career education system strives to emphasize the facilitation of a smooth transition for children and students from school into society. The aim of this initiative is to increase young people’s awareness of their career options and choices, and address the many social issues associated within the current modern workplace. The increase in unemployed young people, and the premature resignation are just some of the many social issues facing the young workforce in today’s world.

In today’s VUCA (Volatility, Uncertainty, Complexity, Ambiguity) era, where the labor market is rapidly changing, the advancement of the government initiative ‘Society 5.0’ and the automation and transformation of job content due to AI innovation, it’s crucial to develop not only technical skills but also creativity and critical thinking skills that cannot be replaced by AI. Career education endeavors to help students deepen self-understanding, adapt to societal changes, and shape their own careers, with an increasing number of schools adopting career education programs offered by private companies.

This study analyzed the impact of the Career Axis Support Program (CAS Program) provided by Japan Travel Bureau company (JTB) on the career consciousness and focus of high school students in Yamagata Prefecture. To provide a multifaceted evaluation using both standard interview and survey research methods.

The findings indicated that through the career education program, students had opportunities to deepen self-awareness and cultivate a positive attitude towards societal engagement. However, the results suggest that further support is necessary for students to develop and implement concrete action plans for their future careers, and that the sustainability of the program’s effects requires ongoing tracking, measurement, and refinement for continued improvement.

Keywords: Career Education, Study tour, Self-understanding, Career Awareness